

おやつのかん3 -ちょっとひとやすみ-

—ジグソーパズル—

NO. 22



先日、〇〇温泉の露天風呂に浸かり、ちょっと疲れを癒していた時のことです。隣にお父さんと息子の親子が入ってきました。息子といってももう成人。親子とも働いていて、週末のんびり過ごしているようです。「お父さん、明日は仕事行かない?」「今日は帰らない?」「温泉、温泉!」と、私の聞き慣れたイントネーションを繰り返し、でも、ニコニコ笑顔でした。湯船に入る前に、かけ湯をし、身体を洗い、タオルは湯船に入れずに手に持っていて、入浴の心得もバッチリです。お出かけし慣れている風格がありました。なんだか“いい湯”になってきました。

さて、露天風呂を堪能ししばらくすると、お父さんが「そろそろ出ようか」と、息子さんに声をかけます。「じゃあ10数えたら出よう」とお父さん。息子さんは数え始めます。「1, 8, 3, 7, 5, 9, 4, 6, 2, 10」と元気な声で。すると「数え終わったか?」とお父さん。「おわった」「お風呂出る」と、二人で内風呂に向かっていきました。

いや~、まいりました。そのなんとも自然な姿に硬い頭を叩かれたような気持ちになりました。ちゃんと10数えていましたよ。もちろん正しくはないですが…、ん?正しくなかったのかなあ?

似たようなことが、普段子ども達と向き合っているときにもあるように思います。

「早くしなさい」と言いたくなるような場面。大人は「1, 2, 3」と進むべきだと思っていることですが、その子は『1』の次は『4』が気になっているのかもしれません。少し待っていれば、『2』や『3』にも手を伸ばすのかもしれません。まるで、ジグソーパズルが出来上がっていくように、虫食いの的に解かっていくこともあるんですよ。同じ景色を見ていても、隣の人が、同じところに感動しているとは限りません。思いもよらぬところに注目して、ちがう感動を味わっているかもしれない。興味関心の柔らかさは大切にしたいものです。

もちろん、「1, 8, 3, 7, 5, 9, 4, 6, 2, 10」でOKなわけではありません。順を追って数えることがスタンダードなんだと、知って使えていかなければなりません。でも同時に、「キミにはそう見えているんだね」「そういう枠で捉えているんだ」と、その感性もリスペクトされるべきだなと思います。ハプニングにならない“程よい”範囲でね。

おしゃべりは達人なのに、言われていることの理解が伴っていない子がいます。「これだけ話しているのだから、このくらいのことは解かっているはず」と思われ、声かけだけで指示され困ってしまう姿があります。小さい頃から文字や数が読めたり書けたりするのに、身のまわりのことが、上手くできなかったり、お友達と上手く関われなかったり。「まずはこっちからでしょ」と言われ強いられてしまう子がいます。言われてできるのであれば、とっくにやっています。身に付けていく順番が少し違うのでしょうか。枠をちょっと広げて、“当たり前”にこだわりすぎずに、回り道を少し試してみる姿勢も、時には大事なのかなと思います。ゴールは同じ『10』を目指して。

「だいじょうぶかな?」「どうなるのかな?」と心配していたけど、じっくり見守って、炙り出された姿が見えてきたら、「そうだったんだ!」と大感激したことが何度もあります。

まあ、『1』から『8』に飛んでったときには、ビックリしましたけどね。(H30. 3) K

